

沿岸漁業構造改善事業調査

(青森県浅海漁場環境調査)

担当者	調査普及 課長	福 士 武
	技 師	長 峰 良 典
	"	安 田 徹
	増殖課長	津 幡 文 隆
	技 師	頼 茂
	"	高 橋 邦 夫
	助 手	長谷川 義 彦

I 目 的

沿岸漁業構造改善計画策定のために、陸奥湾地区を除く浅海漁場において漁獲の対象と考えられる底棲生物の分布および漁場環境について調査を行い、将来、開発可能と考えられる未利用地域の増殖対策を考察することを目的とした。

II 調 査 内 容

1. 調査日程

漁 協 地 先	調 査 年 月 日
沢辺，大間越，黒崎外二ケ字，岩崎	37年8月28日～29日
臚 作，深 浦	37. 7. 3～10
風 合 瀬，晴 山	36. 8. 2～ 3
鯨 ケ 沢	37. 8. 8～10
十 三，脇 元	(沿岸漁業集約経営調査資料による) 35. 7.18～21 及び25～29
車力，十三，脇元，小泊	(沿岸漁業集約経営調査資料による) 34.10 ～ 11 及び35.11
佐井，原田，奥戸，大間	38. 6. 3～ 8
大 畑	37.12.11～15
石持，野牛，田畑，岩屋，尻労	38. 6.11～15
泊 ，白 糠	38. 6.18～22
百石，市川，八戸，白銀	37.11.26～29
鮫	37. 6.19～25
階上（大蛇～小舟渡）	37.10.26～29

III 調 査 方 法

各地先の特異性及び既存資料によるものもあるため、全海域について統一した方法では実施できなかった。原則として、岩盤地帯では海岸に300m～2,000m間隔に基点をとり、海岸に直角に観測線を設定しおよそ50m毎に観測点をとり、水深、底質および視きによる生物相の観察を行った。又砂浜地帯については桁網による採集を加えた。漁場図作成にあたっては、地理調査所発行

の $\frac{1}{25,000}$ 又は $\frac{1}{50,000}$ 地図を引伸したものに作図した。実測によらない等深線は点線で示した。

IV 調査結果

青森県浅海漁場環境調査報告書（その 1） 昭和 38 年 8 月

青森県水産試験場 参 照

V 考 察

本調査は 1 年半という短期間に海岸線延長 410 Km の広範囲にわたって調査を行ったことや、既存資料及び聞取調査によったものもあり、十分な結果は得られなかったが、結果を総合してみると、これら外海に面した地区における効果的増殖手段としては、次の 3 点に要約されるように考えられる。

- ① ノリコンクリート面造成
- ② ワカメ、コンブを対象とした岩礁爆破
- ③ エゾアワビの移殖

②のコンブは下北半島及び太平洋岸が対象となり、その他は全沿岸が対象となる。

研究段階としては、コンブ延縄式養殖（三厩以東の津軽海峡，太平洋）ワカメ延縄式養殖（全県）は耐波性の問題を解決することにより今後急速に発展するものと考えられる。ホッキガイ増殖は移殖効果調査結果をまたなければならないが、太平洋岸の砂地地帯が対象となる。又、需要が増している 1 本釣の生餌としてイカナゴの短期蓄養、ドジョウの養殖、イワムシの養殖、更に、タイ、スズキ、クルマエビ等の沿岸変級魚の蓄養殖は今後の課題であらう。